

ツリフネソウ属の新帰化植物

土屋 守*

Mamoru Tsuchiya: *Impatiens biflora*, a newly naturalized plant in Japan

1992年7月5日のことであるが、千葉県野田市の江戸川河川敷にて橙色の花をつけたツリフネソウ属の1種を採取した。花の色以外は全形キツリフネによく似ており、初めて見たときにはキツリフネの花色変異品かと思ったほどであった。キツリフネは普通山地の湿地に見られるもので、なんでこんなところに、とも思った。

周囲の環境はアシが優占し、所々にヤナギ類の疎林が点在している河川敷の川岸で人がほとんど近づかないような所であった。最初に見つけたところには2株だけであったが、川岸を探してみたらやや離れた所2か所で見つけることができた。川岸に沿って長い河川敷を全部見る訳にもいかず、確認できたのは都合5株であった。

翌年はこの河川敷で近隣市町合同消防訓練があり、広大なアシ原とヤナギ類はほとんどブルドーザーの下敷きになった。そのためこのツリフネソウは93年、94年と見られなくなり、絶滅したと思った。しかし、95年にはアシ原は復元し、こんどは川岸から離れた土手のすぐ下の湿地で5株健在であることが判った。以後は生育場所が少しづつ移ってはいるが、毎年確認している。

しかし、確認できる株数は5株程で特に殖えてはいないようである。

今年(98年)は秋の台風と大雨のため河川敷が1週間ほど水没してしまった。1年草であるため、今後の生育が危惧される。

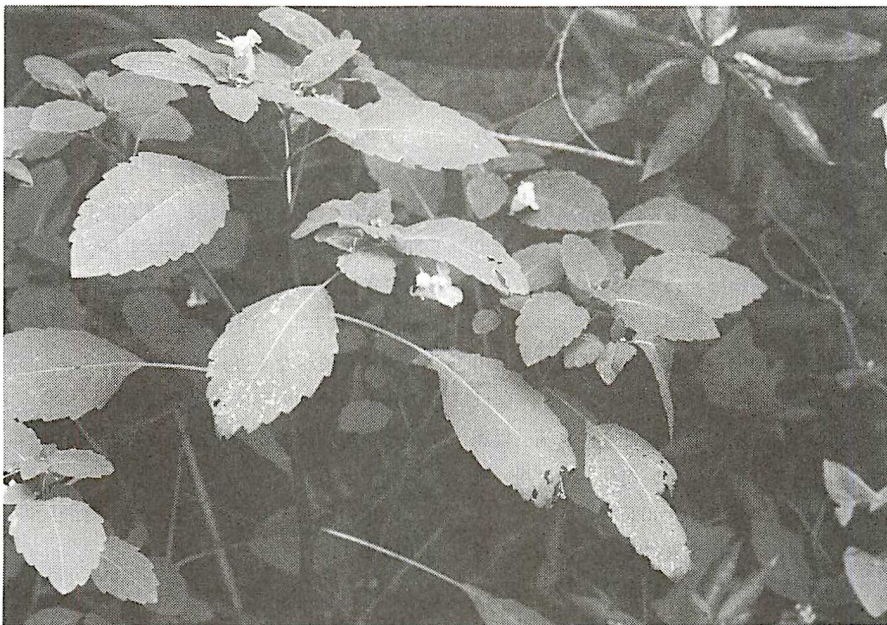


図1. ニリンツリフネ

*〒278-0055 千葉県野田市岩名2-46-7



図2. ニリンツリフネの茎下部，節部は黒褐色を帯びる。

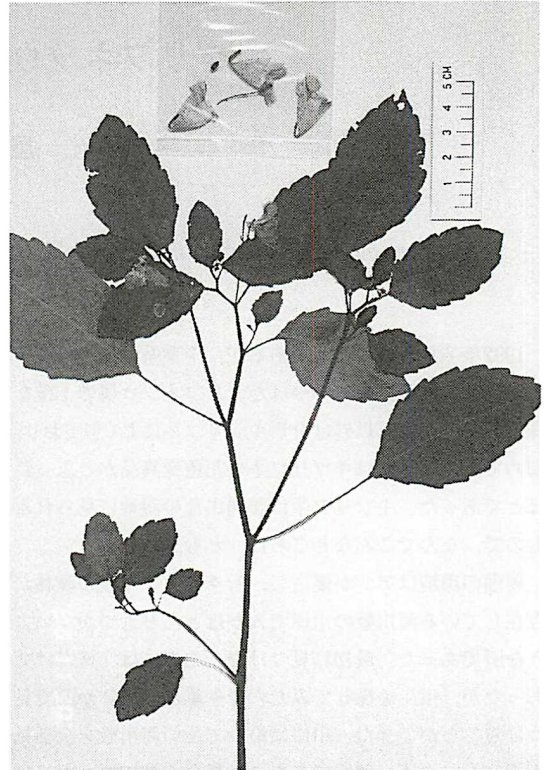


図3. ニリンツリフネ

このツリフネソウは千葉県立中央博物館の天野誠氏により北米産の *Impatiens biflora* Walt. と同定された。

Impatiens biflora は種小名に基づいたとおもわれる加藤真氏 (1992年) による「ニリンツリフネ」の和名があるのでそれを使用したい。標本は千葉県立中央博物館に納めた。

ツリフネソウ属の帰化植物は初めてとおもわれ、採集品による形態を記す。

1年草。全草無毛でやや白みを帯びる。茎は直立し中空，高さ80～180cm。茎の下部に閉鎖花をつける。葉は薄く，互生，葉身は卵形～楕円形で長さ3～8cm，幅20～45mm。先端は鈍く尖り，基部は広い楔形，縁に粗い鈍鋸歯がある。葉柄は細く，長さ10～40mm。

花序は腋生し下垂，1～3花を着ける，苞は小さく線形，花は橙色で正面の幅14～17mm，側面の長さ20～23mm。萼片は3個。側生の2片は広卵形，淡緑黄色。下部の1片は円錐状で橙色，内面に赤褐色の斑点があり径約1cm，後半は急に細まり線形の距となる。距はU字形に反曲。

花弁は3個。上部の1片（旗弁）は橙黄色で赤褐色の

斑点があり，楕円形。左右の翼弁は長さ13mm，幅8mmで基部に向かって次第に細くなり小裂片をつける。

下部の大裂片は楕円形で赤褐色～赤色の斑点がある。雄蕊は5個。子房は線形，長さ3mm。果実は下垂し，細い紡錘形，長さ17mm前後。種子は1～4個。熟すと3裂開しさく片と共に種子を飛ばす。

種子は黒褐色，楕円形，両端鈍く尖り，長さ5mm，幅2mm，縦に隆起した4稜がある。花期は7月上旬～8月上旬。

先にも述べたようにキツリフネによく似ているが，花の色と，種子の形状が異なる（キツリフネでは不明の4稜と不規則に曲がった線や点状の紋がある）ので容易に区別できる。

本種の同定をしてくださった天野誠氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- 加藤 真，1992. ツリフネソウ科の適応放散と送粉様式。
井上健・湯本貴和編「昆虫を誘い寄せる戦略」
pp.43-60，平凡社。